



初代女性首相 — イタリア新政府と雑感

すずき ようこ
鈴木 庸子

●日伊語通訳・翻訳家

去る10月22日、イタリア史上初の女性首相が誕生した。フラテッリ・ディ・イタリア¹（以下F d I）党創設者の一人で、2014年以来その党首を務める、ジョルジャ・メローニ氏である。周知の通り、ヨーロッパにおいて女性首相の存在はさほど珍しくも無いが、この半島におけるガラスの天井が一つ破られたことは事実である。

イタリア共和国で第19番目となるこの国会誕生時に、この国に居合わせた者の一人として、その歴史的瞬間前後の内政事情と、生活者としての雑感を記しておきたい。

2022年9月（24・25日投票）の国政選挙は、F d Iと他3党からなる中道右派連合が、44%の支持を集めて制覇した。F d Iは選挙運動期間中から圧勝が確実視されていたが、結果はこれに違わず、党単独としてはトップの得票率26%を記録。一方、同党と連立した他の3党（フォルツァ・イタリア（以下F I）、レーガ²、ノイ・モデラーティ³）の得票率は、8%台（前者2党）、1%未満と低迷した。そのため、連立政府の頂点にメ

ローニ氏が立つことは当然で、少なくとも正面を切って異論を唱えるような余地は、かのベルルスコーニ元首相——自らは上院議員に返り咲いたものの、前述の通り自身のF I党は辛うじて8%という戦果に終わった——にも残されなかったのである。

ここで、前回のイタリア国政選挙は2018年で、その際のF d Iの得票率は4%強にとどまっていたことを明記しておかねばならない。この政党、野党に徹していたこの4年の間に、支持率を約6倍にまで伸ばし、首相の座まで駆け上ったのである。

この飛躍的な選挙結果の分析や、メローニ氏の背景に関する詳細⁴は、専門家に譲る。

F d Iの特徴としては、もとを辿ればかなり極右の政党の流れを継いで誕生（2012年）した政党であるため、「ポスト（あるいはネオ）・ファシズム」的思想の影を見出す人は少なくないことが挙げられよう。この点に関し、選挙戦中、同党とその党首メローニ氏は、政敵である中道左派政党は

1. 定訳「イタリアの同胞」

2. 定訳「同盟」

3. 2022年10月25日の時点で定訳はまだ見当たらない。「我ら穏健派」を意味する。

4. ジャーナリストでもある新首相は、自らの生い立ちや信念を綴った自伝「私はジョルジア」*Io sono Giorgia*（2021, Rizzoli）を出版している。

もちろん国内外のメディアからも何度となく突かれたが、その度に否定している。また同氏は、自国優先主義や、移民対策をはじめとするEUの姿勢・あり方への懐疑的な見方において、ハンガリーのオルバーン首相との政治思想的近さも度々表明して来ており、新首相自身、ひいてはイタリアが、EU圏内あるいは圏外で、そのようなポジションと見られる可能性も否定できない。実際、選挙運動期の中道左派はこの点を指摘し、中道右派連合が勝利した暁には、ヨーロッパや世界において、国家としてのイタリアの信用性が揺らぎかねないと言う懸念を訴えた。しかし、イタリア国民はそれを厭わない、という結果に終わった訳である。

これら一切のコンテキストや可能性を踏まえた上で、「エネルギーを確保し、同時にその価格高騰を抑制し、前年比12%弱と言う1984年以来の高インフレ率を記録している状態をどうにか解決してもらわないと」との思いを彼女に切実に寄せている人は、政治的思想や社会階級の枠も超えて、現在この国の圧倒的多数を占めているように感じられる。その背景として、例えば我が家のガス代（のうち1㎡あたりの従量料金）は、この9月からそれまでの3倍になる旨、元国営のガス会社から一方的に通告され、これを抑える方法は無いかとサービスセンターに出向いたところ「お客様は恵まれていらっしゃる方ですよ。新規契約する方の料金設定は、お客様の9月からの料金の倍になります」との回答が返ってきたと言え、この国の日常生活の現状を少しご想像いただけるだろうか。誕生したての新首相に対する評価は、当然ながらまだ白紙である。所信表明を終えたばかりの現

時点（10月25日）で唯一形となった彼女の首相としての仕事と言え、省庁編成とその大臣の指名までである。

イタリアでは、政府の交代とともに省庁が名称を変えたり、無任所大臣が生まれたり消えたりするのが常である。とは言え、「海および南（部）」を、省庁の名称と認識できる人などいまい。詩的ですからあるこの字面の奥に、いかなる深謀が込められているのかいないのかは、知る人ぞ知る。なお、数値的には全24省庁、大臣の内訳は男性18名・女性6名。19名が政治家（FdI 9席、FI・レーガ各5席）、5名がテクノクラート、という配置に収まった。

イタリアでの参政権が無い私も、居住者として新政府の政策に影響を受ける立場にある訳だが、我が日常生活が抜本的に転換するようなことは無いと踏んでいる。国を問わず、右の政権に外国人優遇を期待すべきではないのが習いだが、思い返せば左の政権時に特に得をした記憶も無い。選挙運動中メローニ氏が「国家のメサドン」と切り捨て⁵、「廃止（ただし弱者は援助する）」を党の公約として掲げ、所信表明でその構想・施行方法とも「敗北」と明言したベーシック・インカム制度には、その恩恵に一銭も浴していないため、方針に変更があっても家計収入が減る心配は無い。我が家が経済的便宜を実感しているシステムと言え、子供手当的なA UU⁶くらいだが、これはテクノクラート政府だった前ドラギ首相の采配によるものだ。

起動の時を迎えている、歴史的レコードを背負った新首相とその政府。お楽しみはこれからだ。

5. *la Repubblica*, 05 SETTEMBRE 2021, *Reddito di cittadinanza, Meloni: "È il metadone dello Stato". Replica Orlando: "Non sa cos'è la povertà"*, https://www.repubblica.it/politica/2021/09/05/news/reddito_cittadinanza_meloni_metadone_stato_orlando_povera_316619005/

6. Assegno unico e universale per gli figli a carico。成人前の子供一人当たり月額50～175ユーロが支給される。なお、特定の条件を満たした場合に限り支給は21歳まで延長されるが、その際の月額は25～85ユーロとなる。